様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月１０日現在

機関番号：３７１２５
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５９２５３１
研究課題名（和文）　不妊治療後の多胎妊婦のための看護プログラムの開発

研究課題名（英文）　Development of care program for multiple-pregnancy following infertility treatment

研究代表者
桃井　雅子（MOMOI　MASAKO）
聖マリア学院大学・看護学部・准教授
研究者番号：９０３０７１２４

研究成果の概要（和文）：
生殖医療の進歩により、不妊治療後の妊婦・産婦また褥婦の数は増加している。一方、臨床では未だ対象女性の求めるケアが提供できていない現状がある。そこで、本研究では先行研究より明らかにされた女性のケア・ニーズに沿った看護の提供を目指して、看護者への教育プログラム開発を行うことを目的に研究を行った。その結果、看護者側にも不妊治療を受ける女性への看護に関する学習ニーズがあり、その学習ニーズに沿って企画した勉強会に参加することで、それらの学習ニーズが充足されることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this research is to development care program for multiple-pregnancy following infertility treatment. As a result of the first phase of this research, three categories were identified as characteristic care-needs of pregnant women after infertility treatment. Therefore in the second stage, education program for nurse and midwife providing pregnant women has been developed. As a result of the second research, it has suggested that staff (nurse and midwife) had needs to want to learn about care for pregnant women after infertility treatment, and by performing the education program, their needs were satisfied.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	500,000	150,000	650,000
２０１１年度	400,000	120,000	520,000
２０１２年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学
キーワード：不妊、看護継続教育（卒後教育）

１．研究開始当初の背景

生殖医療の進歩により、不妊治療後に妊娠・出産する女性の数は増加傾向にある。これまで研究代表者は、平成 13～19 年度文部科学省科学研究費および平成 22～24 年度日本学術振興会科学研究費を受けて「不妊治療後の多胎妊婦のための看護プログラムの開発」に取り組んできた。そこで明らかにされた妊婦に特徴的な思いとして**不妊治療後ならではの妊娠中のリスクに関する不安**が在

ることが分かり、それを軽減するための看護プログラムとして、**3 つのプログラム、すなわち「①知識・情報提供のための教材作成」、「②個別相談窓口の設置」、「③不妊治療後妊婦の仲間づくりの場を提供すること」、以上を開発することを計画した。**このうち①に関しては、平成 21 年度までに既に教材を作成しており、それによって妊婦の不安が軽減するという効果が確認された。

平成 22 年度以降、研究代表者の勤務先変更に伴い、先の②および③のプログラム開発を、都市部から地方の一総合病院に研究場所を変えて実施することにした。その過程で、“個別相談窓口”や“仲間作りの場”を当病院内に設置しても、実際に、臨床でケアを行う看護者にその必要性を認識してもらわなければ看護プログラムの実現はおろか、定着に繋がらないことが徐々に明らかになった。

以上のことから、**平成24年度半ば以降は、臨床で働く看護者に向けた教育プログラム開発に取り組み始めた。**

２．研究の目的

本研究の目的は、不妊治療後の妊婦及び褥婦のケアについて、産科病棟の看護者を対象にした教育プログラムを開発するために、その前段階調査として学習者（看護者）の学習ニーズについて基礎資料を収集することである。調査票を用いてデータの収集と分析を行い、その結果を基に既存の教育プログラムの内容・方法を、再度、吟味する。また、検討後の教育プログラムを看護者に対して実施し、事後に、学習ニーズの充足に関して調査票による調査を行う。

３．研究の方法

（１）対象者

研究施設の産科病棟で勤務する看護師および助産師。

（２）データ収集方法

まず研究代表者より研究協力の依頼と内容の説明を行い、その後、調査票を配布し調査票の回収をもって研究への同意が得られたとみなす。尚、調査票の配布時には、封筒を添付して、回収の際に封入した状態で病棟に設置した回収箱に他者に気付かれることなく投函できるようにする。調査票の配布・回収は、教育プログラムの実施前と実施後の2 回行い、どちらも無記名とする。

（３）データ分析方法

教育プログラム前後の調査票から得られたデータを比較して、プログラムの内容が学習者の学習ニーズの充足に効果があるかについて内容を分析する。

（４）倫理的配慮

研究実施に際しては、以下の点で倫理的な配慮を行う。

① 対象者の人権擁護

調査説明に際しては文書を用いて説明し、調査への参加は自由意思によるものであり、いつでも中断できることと、不参加や参加中止によって不利益を被ることがないことを保証する。尚、データは個人が特定されないように無記名で処理すること（2 回の調査で対象者を一致させることはない）、本研究以外の目的には使用しないことを保証する。また、研究者が施錠した安全な場所で厳重に保管することとし、研究終了後にはデータを全て破棄する。調査票の配布時には封筒を添付して、回収の際に封入した状態で、病棟（スタッフ控室）に設置した回収箱に、他者に気付かれることなく自由に投函できるようにする。回収箱は、研究責任者のみが中を確認することを病棟師長ならびにスタッフに依頼する。

②対象となる者に理解を求め同意を得る方法

調査依頼と説明は、研究責任者のみが行い病棟師長からは行わない。

③研究により生じる個人への利益及び不利益

利益としては、本調査に回答することで、回答者の学習ニーズが反映された教育プログラムを享受することが出来ると考えられる。一方、不利益としては、回答に要する時間として2回の調査それぞれに約30分程度の時間を要するため、そのための時間を割かなければならないことがある。

４．研究成果

以下に研究成果を（１）プログラム施行前の学習者の学習ニーズについて、（２）教育プログラム検討後の学習会計画について、（３）プログラム施行後の学習者の反応について（学習ニーズの充足と新たに生じたニーズの内容）、の 3 つに分けて述べる。また最後に、本研究の本年度における成果から得られた、次年度に向けての研究への示唆について記す。

（１）教育プログラム施行前の学習者の学習ニーズについて

教育プログラムに関して、学習者の学習ニーズについて調査票を用いて調べた。対象者37 名に調査票を配布し、そのうち有効回答数21 名（回収率 57%）の内容を分析した。その結果、学習ニーズには大きく分けて５つの内容が含まれていた。

①不妊患者の現状・実態

まず＜患者の心理や気持ち＞の実態について知りたいというニーズが認められた。

具体的には、まず「ケアの受け手の生の声が聞きたい」、「妊娠が成立するまでの気持ちや妊娠成立後の心配や不安な事、出産から退院までさらに退院後の思いを知りたい」、「育児中の思いや、悩みの有無とその内容について知りたい」というニーズが有った。次に「パートナーの気持ち」、また「患者の看護者に対するケアニーズ」等について当事者の思いを知りたいというニーズが認められた。

その他、「家族との関係性」、「治療に関する経済的側面」や「不妊治療をすることの大変さ」等についても、その実情を知りたいというニーズが認められた。

②生殖看護について、具体的なケア・支援方法

具体的なケアや支援の方法についても知りたいというニーズが認められた。内容として、まず「メンタル面のケア方法や精神的ケア」、「妊娠中の関わり方や保健指導の方法」、さらに「ケアを提供するに当たり、産後の話をどのようにすればよいか」等について具体的な方法を知りたいというニーズが有った。また「具体的な介入事例や症例検討について学びたい」というニーズも認められた。

③不妊治療について

学習ニーズとして「治療内容や治療成績」、「現在の不妊治療について総論的内容（基礎的知識）」について知りたいという内容が認められた。

④周囲の支援体制（専門的な支援、ピア・サポートなど）の現状

周囲の支援体制に関して「不妊相談、外来でのメンタル・フォロー」、「夫と妻それぞれへのサポートの現状」、「コーディネーターの活動の実際」、「不妊症の人のコミュニティ（存在の有無）」等について知りたいというニーズが認められた。

⑤その他

その他、開催日時や時間帯、また回数等についても調査した。その結果、全員が平日の勤務時間終了後を希望していた。加えて、３交代勤務のため１回限りの学習会では参加できない場合もあり、同じ内容で２回の学習会を企画して欲しい、との要望も認められた。

（２）教育プログラム検討後の教育計画について

先のプログラム施行前の調査結果を受けて、以下の様に教育プログラム（学習会）案を作成、計画した。本プログラムには３つの内容が含まれ、勤務帯により一度に全対象者が勉強会に参加するのは不可能であることを鑑みて、回数は６回を計画した。

①第 1・2 回目のテーマは「不妊女性と家族の思いをご存知ですか？～その思いを知りましょう！理解しましょう！」とした。学習目標は以下の通りである：

・不妊女性と家族の思いと、その思いの個別性と多様性があることを知り理解する。
・不妊女性と家族への看護、また看護者の役割について関心を持ち、考える機会とする。
・具体的な看護への示唆を得る。

②第 3・4 回目のテーマは「不妊治療と生殖看護（不妊看護）の実際について～今、臨床でどのような治療と看護が行われているのでしょうか？」とした。学習目標は以下の通りである：

・不妊治療およびその看護に関する基礎的知識を得る。
・事例を用いた看護の検討を行う。そこでのディスカッションおよび教授を通して、具体的な看護についてより深く理解する。

③第 5・6 回目のテーマは「不妊女性と家族への看護を一緒に考えてみませんか？～具体的な事例検討から看護の糸口、可能性を見つけましょう！～」とした。学習目標は以下の通りである：

・実際に看護者が看護を提供するうえで困難と考える臨床事例を持ち寄る。その事例について、看護に関する検討を行う。そこでのディスカッションを通して、事例の看護について示唆を得る。
・参加した学習者が、自身の遭遇する臨床ケースの看護においても適用できるように具体的な示唆を得る。

（３）教育プログラム施行後の学習者の反応について（学習ニーズの充足と新たなニーズの内容）

まず第 1 および 2 回目の教育プログラム（これらは同じ内容の学習会である）として「不妊と向き合う女性に寄り添う看護～女性と家族の思いの耳を傾けてみませんか？」というテーマで、当事者の思い（実態）を理

解してもらうことを目的とした学習会を開催した。場所は研究施設内の産科病棟において、看護師および助産師を対象に、日勤務終了後の夕方より約１時間半にわたり実施した（2012年９月および2013年２月）。学習会後、質問紙調査を実施した。その結果、学習者のニーズが充足したこと、また学習会参加後に明らかになった学習ニーズとして、以下の内容が明らかになった。

①　学習者のニーズの充足について

学習会後のニーズの充足に関して調査票を用いて調べた。対象者 37 名に調査票を配布し、そのうち 2013 年 3 月末現在の時点において回収された、有効回答者９名の結果について内容を分析した。

まず「今回の学習会が役に立ったか否か」の問いには、**全員が“役に立った”**と回答した。またその理由については、大きく分けて次の３点が認められた。

まず一つ目は**「不妊で悩む女性や家族の現状を知る、理解することができた」**ということである。パワーポイントによる講義や配布された資料を通して、“当事者の声をより多く知ることができた”、また“新たな知識として第２子目の不妊で悩む女性が多いことを知ることができた”、という理由が有った。

二つ目の理由としては**「不妊ケアの必要性を知ることができた（従来のケアとは別の支援が必要であることを知った）」**ということである。まず、“今回の学習会に参加する以前は、不妊治療後の妊産褥婦に対して、看護者自らが治療に関して触れることはなく、一般的な妊娠・分娩・産褥ケアを行っていたことを認識した”という回答が見られた。それが、“今回の学習会を通して、不妊治療後の妊産褥婦に対しては、妊娠中から産後にかけて、自然妊娠後とは異なる保健指導などのケアが必要であると知ることができた”等が、役に立った理由として認められた。

最後に、三つ目としては**「不妊ケアの方法を理解できた（具体的な接し方、心理的な支援について学べた）」**という理由が有った。“不妊治療を受けた当事者、またそれに加えて当事者家族や、周囲を取り巻く様々な人（友人など）へのケア者としての接し方を学べた”、そして“当事者の言葉にまず傾聴すること”、“当事者への声の掛け方やアドバイス方法を学べたこと”、また“ケア者が継続的に関わることが大切であると考えさせられた”、などの理由が認められた。

②　学習会後の学習ニーズの内容について

次に「今後、同テーマの勉強会があれば参加したいと思うか」の問いに対しては**全員が“参加したいと思う”**と回答した。

具体的に学びたい内容としては、まず今後、不妊治療の普及に伴い臨床でケアに携わる機会も多くなることを予測して**「不妊治療の内容・方法・リスクと現状」**について、“いろは”と“過去・現在・未来”について学びたいというニーズが認められた。もう一つは、**「不妊ケアについて（具体的な心理的対応のタイミング・方法、不妊治療後の妊産褥婦の看護等）」**について学びたいというニーズ、さらにケアの対象を広げて**「不妊治療後に流産や死産等を経験したケースへの看護」**に関しても学びたいというニーズが認められた。

（４）今後の研究に向けての示唆

平成 24 年度における研究成果を受けて、平成 25 年度以降は、学習者の学習ニーズの充足に向けて、学習会をシリーズで計画・実施、評価し、ひきつづき**臨床で働く看護者に向けた教育プログラムの開発**を行いたいと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① <u>桃井雅子</u>、不妊に向き合う女性への看護～「女性の思いに寄り添う看護の実現に向けて」～、聖マリア学院大学紀要、査読無、Vol.4、2013、29-34.

② <u>桃井雅子</u>、<u>松原まなみ</u>、田中千絵、事例で学ぶ家族のヘルスケア～家族相談室の窓から「不妊治療中のユキさんご夫婦」、ペリネイタルケア、査読無、Vol.31、No.10、2012、62-67.

③ <u>桃井雅子</u>、双胎妊婦におけるマイナートラブルとケア、BIRTH、査読無、Vol.1、No.7、2012、41-48.

④ <u>森明子</u>、實崎美奈、永森久美子、清水清美、<u>桃井雅子</u>、青柳優子、川元美里、排卵誘発剤の在宅自己注射を行う女性の自己管理状況を測定する質問紙の開発、日本生殖看護学会誌、査読有、Vol.9、No.1、2012、23-28.

６．研究組織

(1)研究代表者

桃井　雅子（MOMOI　MASAKO）

聖マリア学院大学・看護学部・准教授

研究者番号：90307124

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

松原　まなみ（MATSUBARA　MANAMI）
聖マリア学院大学・看護学部・教授
研究者番号：80189539

森　明子（MORI　AKIKO）
聖路加看護大学・看護学部・教授
研究者番号：60255958

堀内　成子（HORIUCHI　SHIGEKO）
聖路加看護大学・看護学部・教授
研究者番号：70157056